



必要性あれば英語は話せる

ばんせ・よしろう 昭和20年生まれ。東北大卒。高校教諭、教頭、校長を経て平成18年退職。栃木県高等学校教育研究会会長、同高等学校文化連盟会長を歴任。19年から現職。栃木県町村教育長会会長。



良朗 伴瀬 栃木県塩谷町教育委員会教育長

元々は英語の教員です。終戦直後の食糧難の時代に幼少期を過ごしましたが、体が弱く、小学校1年生の時には1カ月くらい学校を休んだこともありました。高学年になって新卒の体育の先生が担任になり、鍛えていただきました。おかげで中学校では野球部に入り、中学校創立以来初の県大会に、遊撃手として出場しました。

高校では雰囲気が一転し、英語の担任の「4当5落」の掛け

声の下で1年生から部活動禁止の厳しい受験勉強の毎日が続きました。受験準備のための課外授業が長期休業中を含めて毎日あり、また、当時、全国では珍しい学習合宿もあり、NHKで全国放送されました。

英語の授業の半分は前時の教科書の本文の暗記の確認に当てられ、不十分だと立たされるので皆一生懸命暗記しました。私

は片道1時間のバス通学の時間を暗記に当てました。英語の教科書は2学期の途中で終了し、後は受験問題集に移るので、授業の進度が早く、毎日の暗記の量も大変なものでした。そんな中で英語の教員を目指す気持ち

が固まりました。30代半ばで県立宇都宮北高校に赴任し、校長時代を含め19年間勤務しました。この高校は国

際交流、国際理解、英語教育を特色とする普通科共学校で、中学生に人気があり、高校入試の倍率は県下トップクラスでした。多くの留学生の受け入れや派遣も行っています。私も4回ほど引率や研修で米国に行きました。文科省派遣のペンシルベニア大学での英語研修の際に、高校生に授業をする機会がありました。ある授業で「日本の忍者の給料はいくらか」とか「侍はタクシーに乗るのか、刀は邪魔にならないのか」など、びっくりするような質問もありました。

これまででの経験から、英語は必要に迫られれば話せるようになると思っています。英語を使う必然性をいかに授業の中に生み出すかが、英語を話せるようになる鍵だと思います。私は、学校というところは、勉強するところ、学力を付けるところだと思っています。塩谷町の子供たちは皆素直で礼儀正しく落ち着いた学校生活を送っていますが、一方で積極性に欠ける面も見られます。

また、かつてはたくさん勉強して「良い大学」に入り、「良い企業」に就職すれば幸せな生活が待っているとされ、それが学習の動機付けにもなっていました。今はこのような動機付けが通用しません。

本町では今年「学力向上推進委員会」を立ち上げ、現在の子供たちの学習の実態を踏まえて、各分野の委員の方々にそれぞれ立場から学力向上に向けた率直な意見を伺い、年内に提言と直な意見を報告していただくことになっています。また、教職員に対しては礼儀やマナー、態度、言葉遣いなどにも気を付けるように校長会等を通して指示しています。デューイが言っているように学校は小さな社会であり、子供たちは教職員の言動、態度、教職員同士の日常の生活を通して無意識に社会というものを学んでいることが多いからです。つまり、子供たちは教職員の背中を見て育つと言ってもいいと思うからです。

英語教育についてお話しするとすれば、グローバル化の現在、世界の公用語ともいわれる英語の音声に小さいうちから慣れておくことは英語の学習には大切なことではあります。何より言葉はコミュニケーションの手段であるので、拙速を避け、楽しい授業を心掛け、英語嫌いを

つくらないようにすることが大切だと思います。

次回は雪村新之助・神戸市教委教育長